

母子・父子家庭における子どもの自然体験の不足と、保護者の自分らしい生き方の創出

指導教員 金沢学院大学 芸術学部 准教授 広根礼子
参加学生 大石滯波・清水皓亮・定川浩輔・中田舞衣・藤井葵・室石望・石地結芽・篠田香織
島永拓弥・鈴木舜・中村俊太朗・松村玲汰・山口堇・平井美佳

1. 活動の成果要約

「おおくわこども食堂」と連携し、母子・父子家庭を対象とした、「アートワークショップ」を秋と冬に開催した。秋は、親子一緒に、ひつじをキーワードにして、白山麓の大自然のもと、自然体験や文化的体験を包括した機会を提供することができた。冬は、親と子が分かれて、親の癒しを目的に、クリスマスや正月を楽しめるようなものづくりの機会を提供した。参加者との語らいやアンケート内容から、このような場がいかに求められていたか、その重要性を実感することができた。

2. 活動の目的

「おおくわこども食堂」を利用する母子家庭の保護者から、「子どもが休日に自然体験や文化的体験をすることができない」「母子だけではやってみようと思えない」「すでにある体験教室は料金が高くて参加できない」という声が上がっていた。

このようなひとり親家庭が抱えるニーズに対して、子どもたちが普段の学校生活や家庭生活では体験したことのない、新しい発見が出来るような「アートワークショップ」の開催と学生達とのコミュニケーションの機会を創出する。

また、ひとり親に対しても、子育てや仕事に追われる日々の中で、自分らしく生きることや人生の楽しみを感じてもらえるような癒しの機会を提供する。

「アートワークショップ」は、デザインと映像を学ぶゼミ生の特性を活かし以下をふまえて開催する。

- ・季節の行事と連動して年3回、夏・秋・冬に開催
- ・子ども（夏）・親子（秋）・親（冬）と対象範囲を変えて実施
- ・近年癒しの素材として注目を集めている羊毛フェルトを導入

3. 活動の内容

2021年6月27日、県営大桑団地集会所にて、「おおくわこども食堂」代表、土井裕平氏と初回ミーティングを行った。以降毎週、基本的に大学の定例ゼミにて、企画に関するグループミーティング・試作品制作・進捗報告を実施した。

夏・秋・冬共に、アートワークショップを行う会場施設の選定や視察、アートワークショップの試作品完成など、企画内容が整った時点で、「おおくわこども食堂」との打ち合わせを開始。その後、募集に関する広報物（図1）が完成すると、「おおくわこども食堂」がSNS（Facebook・Instagram・ジモティー等）を通じて発信。同時に、金沢市全域のこども食堂やシングルマザーの会等のネットワークを利用して参加を促す。募集開始以降、開催日まで継続的に意見交換を行いながら準備を進めた。



図1 アートワークショップ募集用広報物 夏・秋・冬

1) 夏の「アートワークショップ」について

サブタイトル：様々なアート技法を体験！ ペイントTシャツづくり

募集対象：子ども(小学3年生から6年生)

7月、会場となるキゴ山ふれあい研修センターの視察。ペイントTシャツ、消しゴムはんこの試作品やスタッフ用バンダナの作成、タイムスケジュールや説明方法の検証を行った。「おおくわこども食堂」にて企画会議を実施。新型コロナウイルス対策にも配慮して様々なシミュレーションを重ねた。8月22日開催に向けて、募集も順調に進んでいたが、石川県発令の新型コロナウイルス感染症「まん延防止等重点措置」の適用をふまえて、已むなく開催中止とした。

2) 秋の「アートワークショップ」について

サブタイトル：見て触れて食べて感じる ひつじのアートたいけん

募集対象：親子(子どもは小学3年生から6年生)

参加人数：37名(ひとり親家庭8世帯23名、山立会2名、こども食堂3名、学生8名、教員1名)

8月、会場となる白山麓、吉野谷ふれあい交流センターおよび山立会の運営する放牧場の視察兼打ち合わせを行った。羊毛フェルトの試作品作り、人員配置やタイムスケジュール等、様々なシミュレーションを重ねた。9月「おおくわこども食堂」とオンラインミーティングにて企画の共有。抗原検査キットの任意使用の提案や、検温・消毒、家族ごとのエリア指定など、新型コロナウイルス感染対策関連事項に関しても入念な検討を重ねた。

10月10日、山立会のサポートを得て、午前、羊のふれあい体験、午後、羊毛フェルトのワークショップを開催した(図2)。募集要項には、対象者を母子父子家庭の「小学3~6年生の子ども」と明記していたが、実際には幅広い年齢(未就学児2名・小学生11名・中学生2名)の応募があった。家庭によっては、兄弟を預けてのイベント参加は現実的ではないと判断し、すべて受け入れることにした。「おおくわこども食堂」は、お昼にラム肉のカレーライスを提供、フードバンクの食材配布も行った。



図2 左から ひつじのふれあい体験・ラム肉のカレーライス・フェルトのワークショップ

3) 冬の「アートワークショップ」について

サブタイトル：親子でお家を飾り付け！ オーナメントづくり

募集対象：親（小学生以上の子どもの同伴可）

参加人数：32名（ひとり親家庭7世帯15名、こども食堂2名、学生14名、教員1名）

9月、会場となる金沢学生のまち市民交流館の視察を行った。町家建築の学生の家と、大スペースの交流ホールは、同じ敷地内ではあるが、少し離れた場所にある。この2カ所の会場をどのように使用するのがよいか、話し合いを重ねた。秋の「アートワークショップ」において、集中力に差異のある幅広い年齢の子どもに対応した経験から、子ども向けの制作について検討を重ねた。結果、メイン作品の他に短時間で完成するサンタやトナカイの折り紙も追加した。親にリラックスできる時間を提供するために、午前と午後の2部構成の導入を決めた。

11月に「おおくわこども食堂」とオンラインミーティングを複数回開催。開催日の前週に親担当チームと子ども担当チームに分かれ、担当作品を試作。クリスマスらしい遊び心を付加した作品持ち帰り用袋を準備するなど最終調整を行った。

12月12日、交流ホールにて、学生代表のあいさつと参加者による自己紹介のあと、親は学生の家に移動し制作を開始した。親は羊毛フェルトで鏡もち（図3）、子どもはペーパークラフトのクリスマスリースを制作（図4）。最後に、再び交流ホールに集合して、家族単位で作品発表を行った。「おおくわこども食堂」は、親の癒しの一助を担うお茶とお菓子の提供、及び午前の参加者にはお弁当、午後の参加者にはフードバンクの食材を配布した。



図3 親の鏡もち制作風景



図4 子どものクリスマスリース制作風景

4. 活動の成果

今年度開催した秋と冬の「アートワークショップ」について、全ての参加者から好評価を得た。以下各回のアンケートから感想を抜粋する。秋の学生の感想には、『臨機応変・機転・柔軟』というワードが散見する。想定外の対応を迫られながらも、参加者に寄り添い対処したという実感が感じられる。また、冬の学生の感想からは、準備を万端に整え迎えたイベントに対しての安堵と満足感が感じられる。

(1) 秋の「アートワークショップ」

[参加者のアンケートから]

- ・ 子供に普段経験させてあげられないことが1日で盛りだくさんあり、ありがたかった
- ・ 上の子、下の子それぞれが楽しめる時間があってよかった。大人に対しても、学生さんたちのサポートがあり、青空のもと、リフレッシュできた

[学生の振り返りから]

- ・ 保護者と会話をして、このようなイベントがどれだけ求められているかがわかった
- ・ 参加者の子どもの人数や年齢によって、ケアの仕方は変わっていく。その場、その時で、柔軟に行動していくことが大切
- ・ フェルト体験の際、飽きた子どもが外で遊ぶのも容認したように、決めた枠内だけで子どもを

抑え込むのではなく、臨機応変にいろいろな楽しみ方があるべきだと感じた

- ・ フェルト作品の発表で、学生がやさしく質問をしたり、親と一緒に発表してもらったり機転をきかせ、必要以上に発表を強要しない対応が勉強になった

(2) 冬の「アートワークショップ」

[参加者のアンケートから]

- ・ とてもリラックスできて楽しかった
- ・ 親子ともども楽しい時間でした
- ・ 一人っ子なのでお兄さんお姉さんと接することができてよかった

[学生の振り返りから]

- ・ 前回参加した親子が、今回のイベントにも参加してくれていたのが嬉しかった
- ・ 学生が一人一人の子供に対して柔軟に対応できていた事が前回に引き続きすごくよかった
- ・ 子供がいるとできない話(サンタさんは何歳までプレゼントをくれた?)ができたこともリラックスの時間につながったのかなと思った
- ・ 親御さんからの意見や、子供達の楽しい様子から、親と子を分ける時間にはとても重要な意味があり、需要のある貴重な機会なんだと気づいた

「秋のアートワークショップ」の成果は、パネルと動画にまとめて石川県デザイン展学生部門に出品し評価を得た。秋・冬共に「アートワークショップ」は新聞にて報道され、こども食堂の認知度向上と食事の提供を超えた本活動について、意義ある試みとして周知された(図5)。



図5 「アートワークショップ」新聞記事 左秋、中央と右冬



図6 美術館視察

5. 次年度以降の計画

次年度も本活動の継続実施を行う。今後も「アートワークショップ」の場でうまれる、参加者と学生間のコミュニケーションがもたらす意識の変化について考察し、次の活動へと繋いでいきたい。

【金沢市子どもの貧困対策基本計画】には、金銭的な理由で、博物館・科学館・美術館などに行く機会を持たなかった相対的貧困層の子ども(小学5年生)が20%いることが記載されている。特に文化的な体験は、ひとり親家庭にとって金銭的・時間的制約から機会が限定されている。この「体験」の格差を課題と捉え、すでに美術館の見学を視野に入れた視察を行っている(図6)。

6. 活動に対する地域からの評価

今回金沢学院大学広根ゼミの「芸術」という専門性を生かした魅力的な企画により、ひとり親家庭に充実した体験プログラムを提供することができ、この体験を通じて新たなご家庭と繋がる機会となった。また保護者のアンケートから、体験プログラムの満足度が高く、学生への評価も高かった。人間形成や将来の選択肢に繋がる「体験」の格差を埋めるべく、次年度はさらに多くのひとり親家庭にアートワークショップを提供していきたい。(おおくわこども食堂代表 土井裕平氏)